安藤　祐介　著

『本のエンドロール』［推薦中］

（講談社）

私は本が好きだ。国語教師なのだから当然といえば当然なのだが、ものすごく好きだ。普段子育てで自分の時間が取れないが、もし一日自由に時間を使っていいと言われれば、朝から晩まで本を読むだろう。だから読書案内の依頼を受けて正直悩んだ。世の中には膨大な数の本があり、一冊一冊に筆者の想いが込められているのに、その中からたった一冊を選ぶなんて私にはできない！ この本を除いては。

『本のエンドロール』は、本が好きな人のための本だ。「図書館報」の中でも、この小さなスペースにまで目を通しているのだから、今これを読んでいる人はたぶん本好きだろう。ならば絶対に読むべきだ。

主人公は某印刷会社で働く営業マン。本を作ることを通して、様々な人と関わりながら成長していく。・・・とまぁこれだけならただのお仕事青春小説なのだが、この本の魅力は「主人公の成長」というところだけに留まらない。何よりディティールがすごい。綿密な取材を重ねて本の制作過程をリアルに描いており、本に関わる多くの人たちの苦労を肌で感じることができる。『本のエンドロール』にも作り手の血と汗と涙が染みこんでいるような気がして、思わず匂いを嗅いでしまった。

私は普段ハードカバーの本を買わない。ケチな話、高いからだ。でもこの本を読んで考えが変わった。良い本にはその価値にふさわしいお金を払うべきだ。そしてこの『本のエンドロール』こそ、高いお金を払って買うべきものだと、自信を持ってオススメする。

読書案内

佐藤　一斎　著／

川上　正光　全訳注

『言志四録（一）　言志録』

（講談社学術文庫）

「言志四録」は江戸末期の儒学者佐藤一斎の語録である。「言志録」「言志後録」「言志晩録」「言志耋録」の四篇から成り、このうち、「言志録」は二百四十六条から成る。この中から、私が特に北野生の皆さんに触れて欲しいと思う二つの言とその訳や付記を挙げて、この本の紹介としたい。

憤（ふん）の一字は、是（こ）れ進学の機関なり。舜何人（しゅんなんぴと）ぞや、予何人（われ）ぞやとは、方（まさ）に是れ憤なり。

憤一字、是進学機関。舜何人也、予何人也、方是憤。

〔訳文〕発憤するの憤の一字は、学問に進むための（最も必要な）道具である。かの顔淵が「舜も自分も同じ人間ではないか」（成らんとする志さえあれば、自分だって舜のような人物になれるぞ）といったことは、まさに憤ということである。

〔付記〕「俺はなれる」と思うか、「俺はとても成れない」と思うかが、人間一生の分れ路である。松陰を育てた先生の村田清風が富士山を見て次のように歌った。

来て見れば
　さほどでもなし
　　富士の山
釈迦や孔子も
　　かくやありなん

学は立志（りっし）より要なるは莫（な）し。而（しこう）して立志も亦（また）之（こ）れを強（し）うるに非（あ）らず。只（た）だ本心の好む所に従うのみ。

学莫要於立志。而立志亦非強之。只従本心所好而已。

〔訳文〕学問をするには、目標を立てて、心を振い立てることより肝要なことはない。しかし、心を振い立たせることも外から強制すべきものではない。ただ、己の本心の好みに従うばかりである。

＊北野図書館には岩波書店の『言志四録』が蔵書されています。（編集者注）

宮田　親平　著

『毒ガス開発の父ハーバー　愛国心を裏切られた科学者』

（朝日新聞社）［289 H31］

私は三年生化学の授業担当する時に、この本を紹介している。ドイツ人であるフリッツ・ハーバーは高校化学の教科書にも登場し、ハーバー・ボッシュ法を開発してノーベル賞を受賞した。この方法で、アンモニアの人工合成が可能になり、合成肥料が容易に作られるようになった。これが、食糧危機を救い、ドイツの人口増加に大きく貢献した。しかし、アンモニアは爆薬の原料にもなったので、第一次世界大戦の兵器となった。

ハーバーは、ドイツの形勢が悪くなると、早く戦争を終わらせたいがために、毒ガス開発に従事していく。

第一次大戦敗戦後、手を差し伸べたのが、日本の星製薬の創業者星一（ほしはじめ）（星新一の父）であった。そして北海道帝国大学で講演を行った。その後、ハーバーの弟子であるメッツナーが、日本に対して毒ガスの開発技術指導を、広島県の大久野島で製造工場が建てられ、毒ガスの開発が進められた。そして、日本は第二次世界大戦に突き進んでしまうわけである。

ユダヤ人であるがために、ドイツ人になりきろうと努力したハーバーであったが、同じユダヤ人の同胞であるアインシュタインに「才

能を大量虐殺の為に使っている」と非難され、結局、ハーバーのしたことは、戦争の長期化を招いてしまい、戦犯扱いされた。

愛した国に最後は結局裏切られ、国外追放された。祖国の地で人生を閉じることができなかった生涯に私は悲しみを禁じ得ない。

このように、本を通じて化学に興味を持っていただけると幸いである。

読書案内

鈴木 孝夫 著

『ことばと文化』

（岩波新書）［801 S41b］

文化が違えばことばも異なり、用法にも差がある。文化とは「ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝えられていく行動及び思考様式の固有の型」と筆者は定義する。従って、ことばは文化と社会の構造によって規制されることを具体例を示してわかりやすく説明している。

三上 章 著『象は鼻が長い』

（くろしお出版）

日本語の「象は鼻が長い。」の主語と述語は何かと分析していくと、次の結論に至る。日本語には主語はない。大学時代にこの本を初めて読んだとき、小学校から習ってきた国語の文法の知識を根本から覆された一冊。

サン＝テグジュペリ著

『星の王子様』［953 S104］

（岩波書店等出版社多数）

パイロットである「私」がサハラ砂漠に不時着し、そこで小惑星からやって来た王子様と出会う。王子様の星の様子や、彼が地球にやって来たいきさつを聞いているうちに時が過ぎ、王子様がヘビと話していた時に静かに倒れ、姿が見えなくなっていた。

What is essential is invisible to the eye.

日本語ではなく、春休み中に、できるだけ英語版に挑戦してみよう。2年生は、十分読める力はついているし、1年生でもストーリーを知っていれば、Xreading と同様に速読教材としても楽しめると思う。

Ken Robinson, and Lou Aronica 著

『Creative Schools』

（Penguin Books）

皆さんは教育に興味関心がありますか？ 今後少しでも興味関心を持ってもらいたいと思い、この本を紹介します。著者である Ken Robinson 教授は、Ted Talk で最も視聴された動画 "Do school kill creativity ?" の話者でもあります。皆さんも一度は見たことがあるかもしれません。見たことが無い人も、動画を一度視聴してみてください。彼のユーモアや機知に溢れた話は、きっと皆さんを教育の世界に引き込んでくれます。その後この本を手に取るのもいいかもしれません。

彼の最新の著書である "Creative Schools" は、現代の教育システムを批判的に見つつ、新しいあり方を考えさせてくれます。具体的には、現代教育が共通テストや学校ランキングに異常なまでに執着していることに対してです。しかし、子どもというのは生まれながらにして創造的で多様であり、一般化された限定的な物差し、日本で言うところの”主要教科”の共通テストやそれに付随する学校ランキングが、結果的には彼らの健康的な学びを阻害しているのではないかというのが著者の主張です。

ここ40年で世界は大きく変化しました。人口は2倍以上になり、技術革新には目覚しいものがあります。それによって、私たちの生活、考え方や感じ方までに大きな変化があわられています。それに合わせて、教育のあり方も変化しなければなりません。伝統的な知識習得で終わる学びではなく、それらの知識を使って「私たちに何ができるのか」を念頭に置いた教育のあり方が問われています。

大平 健 著

『やさしさの精神病理』

（岩波新書）［493 O32］

ツイッターのタイムライン上で、友人が「しんどい」と呟いていたら、返信して励ます？ いいねだけ押して、見てるよ、一人じゃないよというメッセージを暗に伝える？ 眺めて終わりという選択肢もありますね。では、眺めて終わり、を選択した人は「やさしくない」のでしょうか。

人それぞれやさしさの形が違います。時と場合によっても違うでしょう。相手への思いやり（＝やさしさ）をどう行動（＝目に見える形）に移すかが異なるのです。

精神科医である著者の医院には、様々な患者が訪れます。彼らはなんと、生活の中に溢れる「やさしさ」に疲弊してしまうと話します。患者の身近にいる人達は、決して意地悪い性格ではありません。むしろやさしく接しようとしているのに、患者にとってはそれがストレス。周囲が与えようとするやさしさと、患者の求めるやさしさに齟齬が生じている結果です。逆に、患者が与えるものが周囲と食い違ってしまう例もあります。

やさしさそれ自体は善なるものではないのか。絶対的な善はどこを探したら見つかるのか。人間関係において最善は存在するのか。本書を読み返す度、私自身がカウンセリングを受けている感覚になり、心が整理されていきました。自分にしかないやさしさの形成過程を辿る事もできました。北野高校の皆さんも是非図書館で本書を手にとって、この感覚を味わってみてください。

100冊☆ロング・ウォークへのお誘い

図書館サポーター企画

高校時代に 100 冊読破してみませんか？

１年生の図書館サポーターの一人が、「北野の 100 冊」に挑戦中です。

読書は競争ではないし、量が多ければいいというものでもありません。でも、一歩踏み出さないと、知らないままで終わる世界もあります。一歩、また、一歩。寄り道もしながら、おしゃべりもしながら、あなたも 100 冊の道を歩いてみませんか？　歩く人が多くなれば、それが道になるのです。どこかで聞いたせりふですね（笑）

●図書館サポーターが歩く100冊　　北野高校図書館ツイッターでも随時レポート中♪

ここまでの足跡

１　佐野洋子『百万回生きたネコ』	６　セオドア・グレイ『世界で１番美しい元素図鑑』
２　大阪大学ショセキカプロジェクト『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』	７　沢木耕太郎『キャパの十字架』
３　ソフォクレス『オイディプス王』	８　J・D サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』
４　中島敦『李陵』	９　小川洋子『博士の愛した数式』
５　ハインリッヒ・シュリーマン『古代への情熱』	10　サン・テグジュペリ『星の王子さま』
	11　森毅『まちがったっていいじゃないか』

● 100 冊めざして歩いてます！　３冊、選んで紹介します。みなさんもぜひ100冊☆ロング・ウォークに参加しましょう☆

「百万回生きたネコ」

"生きる"とは何か"愛"とは何か"幸せ"とは何かに気づかせてくれる絵本です。絵本なんて子ども……と侮ってはいけませんよ。たとえ涙がこぼれてしまっても大丈夫なように、１人でゆっくり読むことをオススメします。猫を飼って可愛がった百万人の人間たちと、最後にネコが愛したたった１匹の白いネコとは何が違うのでしょうか？　それはきっとただ一つ――読んで見つけてくださいね。

「オイディプス王」

我の名はオイディプス。気付けば父を殺していて、母と結婚していました…。読んでいるうちに感じる違和感。だんだんと明らかになる恐ろしい事実。ギリシャ神話にも登場する悲劇の英雄オイディプスの生涯をこれほど臨場感たっぷりに書きあげたソフォクレスは天才だと思う。いつもとは違う本を読みたい人に是非。

「星の王子さま」

王子さまが旅の途中で出会う不思議な人々は私たちの周りにたくさんいる"大人"たちに似ているような気がする。彼らは何かを見失ってはいないだろうか？　ぼくと小さな王子さまが繰り広げる素敵な物語。あくせくしないで、たまには星を見上げてみてはどうでしょう？　毎日たくさんのことに追われて、本当に大切なものを忘れてしまっている人に贈りたい１冊です。